

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

最盛期の紅葉を見に涸沢に行ってきました その2

松本県ヶ丘高校山岳部顧問 松田大

状態が良くなったので北穂方面への縦走も考えたが、天候回復が遅れており、無理は禁物と降ることとした。ザイデンを降りだして暫くして追いついてきた若者を見て驚いた。何と前リーダーの塩谷君であった。聞く処によると、朝松本を出発し、岳沢から重太郎新道を経てきたとのこと、まるでトレラン状態であるが、テント持参のフル装備での行動である。まだ午前中の早い時間であるので十分今日中に松本まで帰ることが可能であるが、涸沢のテント場まで一緒するように話し、談笑しながら降った。

これほど多くの登山者が入ったのと、雪が降ったのとで、遭難事故の起こるのはある面当然で、ガスの切れ間を縫って防災ヘリが飛来し、奥穂北穂間の稜線付近を飛び回っていた。涸沢の紅葉を十分愛でながらゆっくり降ったが、それでも午前中に天場に帰着した。今日になって帰った登山者も多く、天場も大分空きが増えた。序でだからとできるだけ状態の良い場所にテント毎移動した。考えることは誰でも同じらしく、彼方此方で屋越し引越し風景が見られた。午後は其れこそマッタリと過ごしたが、生徒の何人かは涸沢小屋からマットとシューズを借りてボルダリングに熱中していた。(涸沢小屋で無料で貸してくれ、岐阜から来た大人二人と一緒に楽しんでいた)天候はどんどん回復し、明日の好天が約束された。

最終日8日の朝は霜が降りバリバリの状態で迎えた。昨日の遭難者の収容のためか、夜明けと共に県警のヘリが飛来し、ザイデン中間付近でホバリングする姿が目を引いた。以後も何回も飛来し、何件かの事故があったことを物語っていた。池ノ平の池の表面も凍り、水面に映る紅葉を楽しみにしていたが、残念ながら出発の時間になっても融けなかった。



余りの好天に後ろ髪を引かれる思いを抑えながら、朝陽に映える紅葉を十分楽しんでから出発した。人が多い割には順調で、10時過ぎには横尾に降ることができた。横尾から例の作業道を歩いていた処、途中で変なおばさん(ボランティアで色々を監視している人物)が、歩道(登山道)を歩けとうるさく迫り、ケンカしてもしようがないので歩道に戻った。重機で川原を散々ほじくり返し、挙げ句に工事用の道造っておきながら、歩いちゃ

いかんとは何とも勝手な言い分である。休日は工事はしないとの暗黙の了解ができているとも聞いているので、危険というわけでもないし、規制する理由はないと思うのだが、

日本人は一体におとなしく進入禁止の表示に従っているから不思議である。終わりに多少不愉快な思いもしたが、事故もなく天候にも恵まれ、生徒共々楽しい山行であった。



今年の紅葉はそれなりに綺麗であった。山ガールブームは確かで、山には若者が多く見受けられた。(勿論中高年も相変わらず頑張っているが…)混雑、混雑という前評判を避けたのか、昨年よりは人出は少なかったように思われた。(涸沢小屋の従業員氏の見立てでは、昨年のテント数約1200張り、今年は約1000張りとのこと)お蔭で渋滞もそれほどではなく、割合歩きやすかった。混雑を避け、入山日を調整し

た登山者も多かったようで、最終日にも多くの登山者とすれ違った。横尾では、教育センター勤務の横内さん(元塩尻志学館教諭)とすれ違った。テント泊で涸沢だと嬉しそうに話してくれた。

「山の文化 I N 長野」講演会のお知らせ

2003年3月に、山岳同志会の創設者で元日山協会長の斎藤一夫さんらが「山岳文化よ、大いに起これ」と提唱し、山岳文化に関する調査、研究、保護、保存と振興および普及を目的として設立された日本山岳文化学会をご存じだろうか。長山協では、この日本山岳文化学会に日本ヒマラヤ協会を加えた三者の共催で11月17~18日に「山の文化 I N 長野」と題した講演会を開催する。目的は、「共催三者が、それぞれ得意とする分野の演題を持ち寄り発表し、世界的な視点と地域的な視点を組み合わせることにより、山岳文化の掘り起こしと視野の拡大に寄与し、併せて地域登山愛好者の便宜に供し、登山の素晴らしさを地域社会に浸透させる。」というものだ。申込締切は10月31日。センターの収容人員の関係で定員は45名となっている。概要は以下のとおりであるが、詳しくは長山協のHPを参照、または私までお問い合わせください。お早めに申込を!

【日 時】 2012年11月17日(土)13時~18日(日)14時

【会 場】 長野県山岳総合センター(大町市)

【講 演】 ①②は17日、③④⑤は18日

- ① アーネスト・サトウと武田久吉 日本山岳文化学会 金子靖夫 氏
- ② 「山岳博物館60年史と収蔵実態」【山岳博物館、山岳図書資料館視察を含む】
市立大町山岳博物館 宮野典夫 氏
- ③ 「ニホンジカはなぜアルプスの高山帯をめざすのか」
信州大学農学部教授 泉山茂之 氏
- ④ 「明治・大正・昭和前期の新聞に見る信州登山界」
山岳ジャーナリスト 菊地俊朗 氏
- ⑤ 「日本ヒマラヤ登山通史のまとめ」 日本ヒマラヤ協会会長 山森欣一 氏

【参加費】 10,000円 受講料、宿泊、夕食懇親会(温泉入浴付き)、朝食、昼食

【申込締切】 10月31日 但し定員に達した場合はその時点で募集を終了します。